

ひと筆

禪のこころ



滋賀弁護士会会員

円城 得寿

Enjoh, Tokuju

1 嗣法（しほう）修習

2012年12月10日、私は雪深き永平寺の門前に立っていた。

それまで25年間勤務していた東京での会社勤めを辞め、一念発起して司法試験に挑戦し、合格の後、司法修習を終えたばかりであった。

私の実家は滋賀県守山市にある曹洞宗（禅宗）大光寺で、2回試験の結果発表までの間、曹洞宗の一人前の僧侶になるための仕上げの通過儀礼である瑞世（ずいせい）を受けるために永平寺を訪れたのである。瑞世では、永平寺で一日住職をさせていただける。

禅宗で、弟子が師の法を受け継ぐことを嗣法（しほう）という。瑞世は法を受け継ぐための最終研修であり、いわば嗣法修習ともいえるものである。

開山堂で曹洞宗の開祖、道元禅師に拝謁し、形式的なものではあるが本堂で約200名の修行僧を指揮して導師を務めた後、永平寺の幹部である高僧ご老師様とお茶をいただきながら歓談させていただいた。

その時に、気分が高揚していたこともあり、つい、「私はこれから弁護士になって、世のため人のために尽くしていきたい。」と、言ってしまった。

するとご老師様は、ただ一言、「捨てよ」とおっしゃった。余計なことを考えず、一切の執着心を捨てて、ただひたすら目の前の自分の役割を果たしなさいという意味であった。

2 只管打坐（しかんたざ）

禅の世界では、人の心の迷いの根源は、物に対する執着心、思い込みなど心の煩惱にあると考え、すべてのとらわれを投げ捨て放り出し、無の心になることを重視する。この心を「喜捨」と表現したり、「放下（ほうげ）」と表現したりする。曹洞宗では、特に「只管打坐」と表現する。ただひたすら座禅をするという意味であるが、無の心になるためという目的すら持つてはならず、徹底して心のとらわれを捨て去

ひと筆

ることが求められる。何も座禅をするときだけの話ではなく、仕事や趣味、恋愛にいたるまで、日常生活のあらゆることに通じる心なのである。

ご老師様が「捨てよ」とおっしゃったのは、私が司法試験に合格して誇っていたことを見透かし慢心をいましめ、ただひたすら仕事をせよと励ましていただいたのである。

3 大船観音寺での出会い

禅の心を日常に生かしていくのはなかなか簡単ではない。人にはどうしても先入感や思い込み、プライドなどがあり、それに心がとらわれてしまうのが常だからである。

私が東京に在住していた時に、大船観音寺の住職をされていたO老師とお話しさせていただく機会があった。O老師は、当時80歳くらいで、私の故郷の滋賀県の寺院で住職をされながら中学校の校長を務められて定年退職された後、息子さんに滋賀の寺院の後継を委ね、自らは東京に単身出てこられて曹洞宗の宗務所で役員をされていた。その後、75歳で3年間渡米されアメリカで禅の布教活動をされ、帰国されたばかりであった。O老師は肌つやもよくて若々しく、とても80歳には見えなかった。

私が、「もともと英語を話されたのですか。」とやばな質問をすると、「いいえ、東京に出てきてから勉強しました。運転免許も持っていませんでしたがアメリカで布教活動をするにはどうしても車での移動が必要なので、70歳を過ぎてから取得しました。」とおっしゃった。私が驚いて「年齢的に大変だったでしょう、どうしてそこまでされたのですか」と聞くと、「アメリカに禅を広めるのが自分の役目だと思ったからです。役目を果たすために必要ならどんなことでもやります。年齢なんか関係ありません」と諭された。

年齢の制約、英語が苦手、過去の経歴、人は先入感や思い込みで心に壁を作りがちである。私は、O老師から、自分が信じる役目を果たすために、ただ一心不乱に目の前の役目を果たすためにあらゆる努力をすることが大切であると教えられたのである。

4 曲直瀬道三(まなせどうさん)

2016年1月、歴史秘話ヒストリア(NHK総合)で、戦国スーパードクターとして曲直瀬道三が取り上げられていた。番組の冒頭でも紹介されていたが、実は、道三は、私の実家の滋賀県守山市の曹洞宗大光寺で修行して学を取めたとされている。

ひと筆

道三は、戦国時代に生きた医者で、それまでの迷信や観念的な医術を改め、実証的な臨床医学の端緒を開き、道三流医道を完成させた。また、毛利元就や織田信長等の戦国武将の診療も行っている。

番組の中で、「道三は、後進を育成することが自分の役目と考え数百人の門人を育成した。」「貧しい人を治療する施設の運営を手伝うために80歳頃にキリシタンに改宗した。」「医術の知識を広めるため、当時都で流行っていた俳諧を使って、わかりやすく庶民に医術の知識を伝えた。」と紹介されていた。

自分の役割を後進の育成、世の人にわかりやすく医術を伝えることにあると考え、無心になってただひたすらその役割を果たそうとしたのであった。先入観や思い込みで心に壁を設けず、年齢に関係なくキリシタンでも俳諧でも何でも新たに学んで取り入れ、あらゆる努力をした。道三は、やはり幼少時に培った禅の心を生かして自分の役目を果たしていったのだと思いながら、私は番組に見入っていた。

禅の心を弁護士業務の日常に生かすのは簡単でないが、生かそうと考えることすら意識せず、まずは何事も目の前の仕事にひたすら打ち込み、ベストを尽くしていくことを心がけていきたい。

当論文の著作権は当執筆者にあります